昭和61年1月1日発行　（財）高知市文化振興事業団

文化高知 9

城のある街

中島　暁

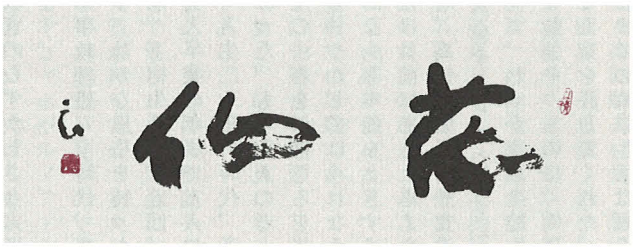
ヨーロッパの都市を回って圧倒されるのは、街の持つ古さである。それも朽ち衰えてゆく後ろ向きの古さではない。博物館のように、凍結されたものでもない。新しい文明と生活を次々に受け入れ、今なお生き生きと、現代の用に耐えている古さだ。

それが都市に重厚な趣を添えている。市民は歴史を空気のように呼吸しながら、毎日の生活を営んでいるのだろう。

歴史の古さで欧州に引けをとらぬ日本だが、都市全体が歴史を体現しているような街は、京都や奈良を除くと、あまりない。歴史性は街からほとんどかき消え、探し回らなければ見つからない。まるで歴史のない、にわかづくりの街のようである。それほど市街はきらびやかなビル群に覆われてしまった。残念ながら高知市も例外ではない。

ただ一つ、歴史を語るものがあるとすれば城下町都市の城であろう。ただし、外国人の目には少し異様に映るようだ。ピカピカのビル群に埋まった周りと調和しないのである。現代のただ中へ、中世が唐突に顔を出している。スーツ姿の群れのなかに、ひょいとチョンマゲの侍がまじったようなものだ。

慣れぬ外国人にはちぐはぐと見えるが、日本の都市にとって、この城はやはりなくてはならぬものである。これこそは、市民の日常生活に〝必需品〟として生きている古さというものだ。



花仙　福原云外

文化財であり、観光資源であるが、同時にその街のルーツを示す証（あかし）でもある。都市のほぼ中央にそびえ立ち、言わず語らずその街の由来、由緒を示してみせているのである。

これは大事なことだ。歴史や過去を知らぬ状態で、人間は安んじて生きられるものではない。自分が何者か、その確認ができないからだ。根なし草の身の上に耐えられなくなった時、人はルーツを探し求める。自己確認の旅に出る。城のある町は、その城の存在によって、おのずから歴史が証明されていると言ってよい。

その城が、市民の心の束ねをなしている意味も大きい。城の東か、西か、市民の方向感覚を城が支配し、それが学校や町の名前を決める。市民連帯が大きく崩れようとするなかで、城の存在が辛うじて最後の糸をつないでいるようである。

戦後、鉄筋コンクリートで城を再建した街もある、と聞いた。日本の都市における城の意味を考えると、鉄筋城を建てた気持ちも理解できる。街をイメージアップし、都市の核心となり得るものは、やはり城ということだろう。街がまばゆい現代色に塗りつぶされてゆけばゆくほど、城の持つ古色も輝きを増してゆく。

城のある街は幸せだ。今後のまちづくりのなかで、城の景観をどう位置づけるか、これは文化の問題としても真剣に考えるべき課題だろう。

（高知新聞社代表取締役社長）

漫画的都市論

改田昌直

大正十二年室戸生まれの私は幼児の頃から、街のひとり歩きが好きで、町並みの光景、商売往来の数々、大人たちの生活風俗の様々に見飽きることがなかった。たそがれ燈ともし頃、昼と夜のはざまのひと時、恐ろしいようで甘美に秘密めいた闇の訪れを身に感じると子供心ながら好奇想像力をかきたてられ、腹はへるものの家に帰るのが惜しまれた。

六十の坂道ドッコイショの今もこの好奇心おとろえず、都市空間を遊歩すること一冊の本を読むが如し、時間のタテ糸と空間のヨコ糸によって人間文化の織物が作られる。都市また然りであろうなどと考えている。

父は多趣味の器用貧乏を絵にしたような人物であった。室戸から大阪に移り、書画、写真などの趣味を活かしながらペンキ塗装、看板屋の修行にはげんでいた。私は初めての都会生活すべて物珍しく、度々迷子になりながらも大阪市内を歩き廻った。赤い灯青い灯道頓堀の夜景美しく、大正モダニズムの都市風景は決定的な何かを幼い心にきざみつけたように思える。やがて室戸に帰り、看板、塗装の店開き。漁船のペンキお化粧にもいそがしかった。室戸の街の景観づくりの一端をになっていた訳である。職人根性で無口、コツコツ仕事の父のそばで、いたずら半分ながら絵を描いたり模型を作ったり…小さい体で何かを覚えたように思う。

小学生の頃、地理に興味を覚え、架空の街の地図を克明に描いてたのしんだことも覚えている。漫画は代表的な都市芸術のひとつであるという確信は、この頃から養われたように思える。こわいもの見たさのユウレイ、オバケの活動写真大好き少年、家の近くの津寺や墓場、泉鏡花風の幻想をたくましくするのに恰好の場所であった。室戸台風で初めてこの世の地獄を見た。このような経験を絵にしようと思うにはまだ幼なすぎたが、その六十余年後、この幼児体験はふしぎに生きて『改田昌直のアーバン世界』という小画集ながら、ひとつの形に実を結んだのである。

ナンセンス・ドキュメント、なんせんす紀行などのタイトルで、東京中心ながら十余年来の日本の都市風景、風俗を私なりに記録したつもり。幼児教育のむずかしさと大切さを痛感します。

軍事教練盛んな時代、高知商業に入学、静かな風格を持った城下町の印象。下宿生活転々五回。太平洋戦争突入卒業の年まで友人にもめぐまれ、人生二十年の時代、多感の青春であった。もう大人の考えで自分の人生の決着をつけざるを得ない時代、誰も甘やかしてはくれなかった。動物的な生存本能をとぎすましながらも死は目前にあると思えた。二年生の時、高知新聞正月懸賞漫画で一等の賞金をもらったことがはずみとなって、わずかな余生絵を描こうと、商業勉強そっちのけ。両親もあきらめて上京を許してくれた。学徒出陣の日までの東京生活は短かったが、人生の総仕上げとばかりに居直って、下駄ばきでスケッチに明け暮れる画学生生活であった。

学徒兵として朝倉の機関銃中隊に入る。軍隊もまた社会の縮図、居直っていたせいか、人間観察には恰好の場であった。一時満州。今思えば幸運、また高知に帰る。高知城に防空監視隊として派遣され、深夜歴史の闇につつまれた階段昇り、天守閣に立ち、坂本龍馬の銅像よろしく太平洋の彼方をにらんだ記憶……。その高知市もあの大空襲、惜しい街並みを失った。私もまたその火の中に面会に来ていた母親を失った。往時茫々夢の如しである。

新春早々、極端な乱文となりましたが、今秋六十三歳の老骨、めでたくもあり、めでたくもなしの心情御拝察ください。綿入れの羽織りを着ていると汗ばむ土佐の正月を思いだします。たまにしか帰れず、高知の景観、文化の状況にもうとくなり、いささか慙愧です。

小画集、賞を受け地元テレビのインタビューで高知も絶対描きますと、口走り責任痛感の日々。文明評論風、正統イゴッソウ精神を活かして冷静に、また青春時代の心情もこめて描いてみたいと、老骨にムチ打つ日々を迎えている。経済大国、全国都市化の波、平均的ツルツル無個性の街々が増え、人間、文化、風俗も飽食、平和地獄の様相を呈していると思えて仕方ない。老いの繰り言めくが、高知の街も流行に心うばわれることなく、愚直によきイゴッソウ精神を生かした街づくり、人づくり、文化の花大輪を咲かせてもらいたいと思うばかり、室戸もがんばれよと乱文のペンを置く次第である。

（漫画家・東京在住）

仙台市から学んだ文化のまちづくり

福留　脩文

昨年の夏、仙台市を訪れたのは、当時私の最も大きな課題のひとつであった、鏡川再生にむけての市民活動の方向をさぐるため、その先進地を実際に自分の感覚で確かめてみるのが主目的であった。

近年の仙台市のまちづくりの歴史で、ひとつの重要な時代を画するのが、昭和三十七年という年である。この年というのは、仙台市にとってはその前年に戦災復興事業が完工し、国からは全国総合開発計画が発表され工業の地方分散が極めて精力的に図られようとしていた時期でもある。

その三十七年三月十六日に仙台市では、全国に先駆けて健康都市宣言を発表して、まちづくりに関する市民運動の方向をうち出している。

当初の運動の具体的な目標としては、上下水道や住宅などの生活環境整備、伝染病追放や生活環境浄化などの保険衛生施設の強化、レクリエーションの振興や自然に親しむ運動などの健康生活の充実といった、三つの柱をうちたてている。そして以後、市民と行政が一体となった運動は、産業・交通・建設・教育・文化・民生などの多岐にわたっている。

そうした運動の中で、例えば四十九年の広瀬川の清流を守る条例の制定に至る過程も、三十七年からの毎月十六日まちぐるみ清掃運動から始まり、四十三年の市河川愛護会や広瀬川環境美化推進協議会の結成、四十六年の仙台市公害防止条例、四十八年の杜の都の環境をつくる条例などを経て、健康都市宣言から実に十二年の歳月をかけている。

このような行政と市民の運動の歴史をひもといてみると、各種の方面にわたる施策が健康都市宣言に盛られた理念に共通の目標をおき、すなわち住民意識のうえにひとつのヒエラルヒーを確立しながら、どの運動のポイントから進んでも、常に健康都市の建設に合流するという形式を見出すことができる。

日本の民主主義実現の問題点のひとつに、先進諸外国に比べて、住民意識の無関心性や行政レベルのカベなどが指摘されている。これらに対し、仙台市や最近の滋賀県などの一連の取り組みをみると、わが国においては、各地方自治体での条例による先導が、ひとつの特徴ある方式であるかのように思われる。

が、これにしても運用のしかたによれば、住民意識の向上という社会開発的な側面よりも行政管理的な形骸に陥りかねない。いみじくも五十九年七月十七日の朝日新聞の社説に述べられている「条例が実効性をもつのは、強権を伴った場合でなく、それが市民社会の倫理規範になったときである」と。

（㈱西日本科学技術研究所代表取締役）

もっと観客にパワーを

傍士　敬子

我々高知県人には、想像を絶する〝東京の不思議〟の一つに「マイナーな舞台や美術館が、なぜかいつも満員」という現象が挙げられる。

事実東京では、全国的にもすっかり有名になってしまったテント芝居はモチロンのこと、「こんな所に、いったい誰が来るんだ」と思うような場所での舞踊であっても、情報誌を手にした若者達が、どこからともなく集り、結構満員になってしまうのである。

また、上野の美術館や各デパートなどで催される展覧会には、驚異的な人数が押し寄せ、あたかもそこはバーゲン会場と化すのである。ましてや、ゴッホやルノアールなどだとすさまじい。人ゴミをかき分け観賞するのは相当なエネルギーを使う。記念の絵ハガキ一枚を選ぶのにも決死の覚悟がいるのだ。

さて、そうして高知を見てみるとどうだろう。単に人口的な差ではないような気がするのだが……。

私は絵画や演劇、ダンスなどを観るのも好きだし、実際やってもいるので、展覧会や発表会を見る機会は割合多い。そんな中でいつも感じるのは、本当の観客の少なさである。何も東京みたいな現象がすべて良いとは思わないが、観客にパワーが感じられないのだ。特に美術については、県展や市展などの公募展以外は、ほとんど人が入っていない。数年前の珍しく大きな催しであった「ヴィヤール展」ですら、フロアーに約三名などという、実に快適でふざけた状態であった。人ゴミにもまれて観るのに慣れていた私は、すっかりファイトを失ってしまったものである。

結局、高知の多くの観客達は、知り合いが出品しているから、友人が出演しているから、という親近感から、その場へ足を運ぶのではないだろうか。この催しに興味がある、刺激を受けたい、好きだ、というような純粋な要求を持って訪れる人はいったい何人いるのだろう。

高知県人は、すべてにおいてもっと貪欲な観客になる必要がある。そんな意識を高めるためには、教育と美術館や多目的ホールなどの施設が充実しなければならない。文化は大衆＝観客が育てていくものなのだ。

天を仰ぐバッコスの信女

酒と豊穣の神

山崎　拓

何度か通ったパリであったが、今年はじめてルーブルでオリエントのギルガメシュ像に接することができた。高さ四・五メートルもある厚肉の浮彫を下から仰ぐと、その迫力は予想をはるかに超えるものであった。長大な髭を蓄えたあごのうえに、爛々と輝く鋭い目、英雄にふさわしく威厳に満ちた顔だ。右手は掌を正面に見せて蛇を握り、左手はしっかりとライオンを抱いてる。ライオンのむき出した歯、ギルガメシュの胸や左太股あたりに、上衣のうえから肢の爪を立てたその姿態が、ひどくリアルなのだ。

圧倒的な力である。

ギルガメシュは紀元前二千七百年頃に実在したシュメールの王だが、早くから神話化され、その説話は人類最古の文学である「ギルガメシュ叙事詩」として、今日ではわが国でも翻訳によって読むことができる。この像は、翻訳の主要なテキストとなったアッシリア語粘土板よりも五十年古い、前八世紀のアッシリア帝国時代の宮殿にあったものである。だから、これは《王》の彫刻ではなく、神話化された《英雄》の像なのである。

そもそもこの叙事詩は、旧約聖書の「ノアの洪水」の話のもとになった洪水が物語られていることで、その解読がキリスト教世界の人びとに大きな衝撃を与えた。「大洪水」そのものも歴史的事実であったことは考古学的にも確かめられており、ギルガメシュは「大洪水」後の実在の王であった。この大洪水の箇所に、はじめてワインが語られるのである。赤ブドウ酒も白ブドウ酒も、またお神酒という言葉も出てくる。

この他にもう一箇所、酒に関する話がある。

ギルガメシュは《永久の生命》を求めてさまよう者であった。

ギルガメシュの友人は、神々の定めによって人間の宿命としての死を与えられる。その死を嘆いてギルガメシュは、居酒屋のおかみに不死を求めるのである。

「女主人よ、お前の顔を見たからには、私の恐れる死を見ないようにさせてくれ」

女主人はギルガメシュにむかって言った。

「ギルガメシュよ、あなたはどこまでもさまよい行くのです。あなたの求める生命は見つかることがないでしょう。

神々が人間を創られたとき、人間には死を割りふられたのです。生命は自分たちの手のうちに留めおいて、ギルガメシュよ、あなたはあなたの腹を満たしなさい。昼も夜もあなたは楽しむがよい。日ごとに饗宴を開きなさい」

矢島文夫氏も訳書で注記しているように、女主人とはアッシリア語でシドゥリである。エリアーデによると、これは「酒を持つ女」と表現されるシドゥリ神のことで、ここはギルガメシュが彼女とブドウ樹のそばであい合う場面を意味するという。

この神は、はじめ「母なるブドウ」とか「女神ブドウ」とか呼ばれた。また近東地方ではブドウ樹は「生命の草」とみなされていた。ブドウは不死の植物的象徴であり、ブドウと女神は結びつけて考えられていた。ブドウは永遠の生命の木であり、大女神は創造の尽きることのない源泉であって、すべての実在の究極的な基礎の擬人化である、と宗教学者エリアーデは述べている。

旧石器時代後期から、目鼻だちははっきりしないが、豊かな乳房、ふくらんだ腹、幅の広い腰つきの女性土偶や石偶が現われる。エリアーデをまつまでもなく、これらの生殖と多産の女神は人類が最初に持った最も根源的な神なのである。農耕の開始と共にこれらの女神は豊穣の神となっていく。ここに引用した箇所からも察せられるようにシドゥリ神は豊穣の神の性格をもち、同時に酒の神でもあった。ブドウ酒を蒸溜したワインの精には《生命の水》という名が与えられているが、エリアーデが言うように、この名称の深層にはブドウが「永遠の生命の木」であるという原始の記憶が秘められているように思われる。

ワインを語ってディオニュソスに触れないのは、片手落ちというものであろう。

ルーブルでこのとき私は思いがけない発見をした。今まで図版でも見かけたことのないディオニュソス誕生の彫刻があったのだ。それは、時代は少し下って紀元四世紀の、石灰石製の比較的目立たない作品であった。ディオニュソスはブドウの房をたわわに実らせた木の枝の間から、裸体の童児の姿で生れたばかりである。後にギリシャのオリュンポスに祭られることになったこの男神は、もともと小アジアで樹木や果樹の精霊としてあがめられた神格を負って成立した神である。私は、酒の神としてのディオニュソスをはっきりと示した像に出会うことができたのだ。

植物や作物は、年ごとに枯れて死に、また人間の食物となり、ついではまた地に播かれて入り、春の到来と共に再び蘇る。死を克服してあらたな生の喜びに溢れ漲る。ディオニュソスという言葉自体「天と地との子」を意味するという。この神は同時に豊穣の神でもあった。ディオニュソスの崇拝は集団的な興奮のうちに恍惚境に入る祭儀を伴った。オルギーと言われる儀式である。

ディオニュソスはローマではバッカスと呼ばれた。

はじめて訪れた大英博物館で見た二つの作品はオルギーの雰囲気を持っていた。

一つは「バッカス祭の行列」。これは、ローマの南、アッピア街道にある古代ローマの別荘から発見されたもので、前四世紀の原型をとどめる一世紀の作品である。先頭を行くは、半狂乱したバッコスの信女。鐘鼓を打ちながら天を仰いだ顔は神がかりした様子を示す。続くはバッカスの従者サテュロス。馬の尾を持つ半人半獣のこの山野の精は、頭には常春藤の冠をかぶり、肩には角を持った野獣に毛皮をかけ、両手に持った笙と笛を懸命に吹いている。最後にはもう一人のサテュロスが、テュルソスと呼ばれる、先端に松笠を結び蔦を巻きつけた杖を右手に、ついている。そしてまたバッカスの聖獣ヒョウも行列に従っている。神話で読むバッカス祭をよく表現した浮彫である。

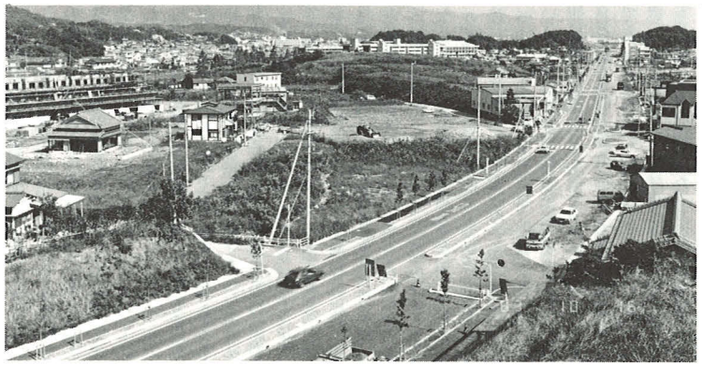
もう一つの興味のある作品は、ポンペイの地下墓室を飾っていた壁画「バッカス祭の踊り」だ。同じく一世紀のものであるが、この祭の無秩序と躍動する熱狂を表現して余すところがない。

永遠の生命としての酒と、オルギーの手段としての酒という二つの性格は、今日の酒の文化にも受け継がれていると思う。

私の風景

大谷地区の変貌

小林　勝利

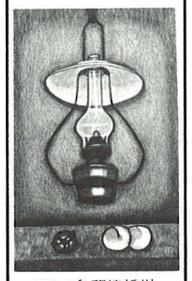


△ 昭和58年10月16日

▷ 昭和60年10月6日

長寿社会がやって来る

武田京子



ランプ　間崎哲州

人生八十年時代、長寿社会の特徴はいくつか挙げられるが、日本では長寿化の速度が、福祉先進国のスエーデンの三分の一、フランスの五分の一という早さで訪れるために準備に立ち遅れがあること、そして、社会経済情勢の変化が著しく、暮らしの中での価値観が多様化しており、さらに、核家族化、都市化などがいわれているが、何にもまして、お手本のないことが大きな問題と考えられる。欧米追随型であった日本社会は、これからは、みんなが知恵を出し合って、お手本のない長寿社会を乗り切る工夫をしてゆかなければならない。

県下の婦人五百人を対象に実施した「高知の婦人・その意識と現状」（昭和六十年四月発表、県生活婦人課）によると、老後に対する不安の第一位は健康のこと、第二位は夫に先立たれること、第三位は生活のこととなっており、老後の健康に対する不安は高年齢層になるほど高くなっている。

老後の生活設計については「主として年金」と答えた人が最も多く、次いで「年金、資産、自分の収入、子供の扶養」のミックス型で、なかには「年金のみ」という答えも出ている。このように老後の生活設計は年金中心に考えられているようである。老後の生活安定の条件としては三つのK、健康、経済、家族といわれるが、若いうちからの自助努力に加えて、社会保障としての公的年金に対する期待も大きいことがうかがえる。

ところで、長寿化を左右する出生率の低下傾向がある一方、長寿化社会を支える社会保障費の後世代負担の問題がさまざまに議論されてきている。

経済評論家の高原須美子さんが具体例によって次のように述べている。

A家　子供二人、働き手夫のみ
B家　子供なし、働き手夫と妻

B家は二人分の収入で当然ながら収入が多い。扶養控除が少なく税金の負担が多いにせよ生活は楽である。A家は一人分の収入であるうえに子供の養育のための支出があり生活は苦しい。老後は、B家では二人分の厚生年金が受けられるが、A家は夫の厚生年金と妻の国民年金で、年金額もB家が多い。

ここで年金の財源について考えてみると、年金は自分たちで積み立てた分だけでは不十分であり、後世代負担、つまり成長したA家の子供たちも負担するというシステムである。B家の現役時代に納めた税金はもちろん教育費の方にもまわったという考え方はできるにしても、税金負担と養育の苦労とでは、はるかに大きな差がある。若いうちも老後もB家が経済的に楽であり、それを可能にしているのは、子供たちを育てたA家とA家の成長した子供たちである――と。後世代負担は、子供の有る無しで異なる面をもっており不公平感が出るゆえんにもふれている。こうした負担があっても、年金はどこの国でも最低限の生活保障であり、心豊かに老後の生活を送るためのプラスアルファーの蓄えは個人にかかっていることは論をまたない。

同じ調査で、家族における男女の役割分担について聞くと「夫も妻もともに働き、ともに家を守る」という考え方の人が前回（昭和五十二年）の調査より多くなっており、また、「夫は外で働き、妻は家を守る」よりも多い。年代や未既婚別にみても同様の傾向が見られるが、これを現実生活についての調査結果と比較してみると、現実生活の数値が下回っており、ホンネとタテマエとのギャップがうかがえる。

外で働く夫たちは、家へ帰ると妻に対しては「めし」「ふろ」「ねる」ですべてことが足りてきているであろうが、いま、現役引退後の夫や妻のあり方が問題視されてきている。家庭のことや、自分の身のまわりのことは全部妻任せであった夫と、夫に指示された通りの窓から社会を眺め続けてきた妻が、お互いに車の両輪になって前人未踏の長寿社会の長い坂みちを乗り越してゆかなくてはならない。

渥美雅子弁護士によると、最近の傾向として女性からの相談が圧倒的に多いなかで、六十一歳の女性が性格不一致を理由に離婚相談に来た。結婚歴三十年を過ぎて性格不一致とは、と疑ったが、聞いてみると確かにそうとしか言いようがない。三十年間亭主は働きさえすれば良い。女房としては、亭主が一生懸命に働いてさえくれたら幸せと感じていたし、亭主は達者で留守が良い、などと割り切って暮らしてきた。女房も、家事、育児に専念して夫と妻による内と外での役割分担業に満足してきた。分担している役割をお互いに果たしていることが、即ち夫婦間もうまくいっているのだという思い込みであった。ところが夫が退職して身近かに暮らしはじめて、あらためて眺める連れ合いの魅力の乏しさよ。尊大ぶるかと見えて何と弱気な亭主。外で働いてこそ頼もしくも見えた。こんな筈ではなかったのに。そうだ今から別の人生を。というわけで、ふりむけば君がいて、ならぬ気が付けば抜け殻夫婦となりて……というケースである。

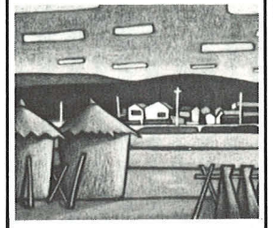
渥美さんは、捨てられる夫、捨てられる妻あるいは親、即ち、嫌われるタイプについて述べたなかに、例えば老人ホームでのワースト・ワンは「先生」と呼ばれないと返事をしない人で、こういう人は、現役時代に大変偉かった人とか、世間で尊敬されていた人に多いのではないかと言っている。大抵の場合、人間は過去の栄光に戻りたくなるという気持ちがあり、現役時代に先生と呼ばれ続けてきた人は、その先生の役になり切って、つまり一人一役にはまり込んで生きてきた人だというわけである。

長い人生である。肩書きがしょっちゅう付いて回るということは、ほとんど望めないであろう。一人一役でなく、一人で多様に暮らしていくすべが必要になってきた。しなやかに、たおやかに、それは丁度男性中心であった社会のカベは厚いが、女性たちはその厚いカベに小さな風穴を開け、女性たちの開けた風穴がやがてカベを崩していくように。前人未踏の社会へ、男女が共同して柔軟な侵入を果たすノウハウを会得してゆかなければならない。

（県生活婦人課課長）

旭の町と私

西谷英雄



風景　間崎哲州

私が旭の町（高知市旭地区）に住むようになったのは、旭小学校の特殊学級担任になった昭和二十六年だから、もう三十四年になる。その頃は、紙すき工場の多い、カルキのにおいが風にただよう町で、工場で働く者、内職をする者、仕事の場所は違っても製紙という一つの仕事で生きている者が多く、気安さと連帯意識で結ばれる村のような町だった。

戦災をまぬがれた町は、灰色の瓦をいただく古い家並を、迷路のような路地でつづり、天が糸の様に見える裏町では、しばしば方角さえ見失うこともあった。このすすけた町がいつもはなやいで見えたのは、澄んだ水がたっぷりと流れる水路が、血管のように町に広がっていたからである。

この町に氏原一郎という福祉の教祖様がいた。目かくしのままでどの家へでも行ける程に町の事情に精通しており、人や家や地区のために寧日のない地域の太陽であった。

氏原さんはやがて推されて市長になった。裏町行政を看板にする氏原さんは、旭の町の水路から、高知の町の新しい水路になった。裏町行政というのは単に恵まれない人々に光をとどけるというだけではない。自力更生の意味も強くある。これは貧しさと対決しながら、明るくたくましく生きぬいてきた旭の町の生活哲学でもある。

良い例がある。地区の社会福祉協議会はコンクリート製のチリ箱を作って売り、その収益で多彩な福祉活動を展開した。私たちの学級もその恩恵をこうむったものである。

こんな町であるから、昔から学校を大切にする気風が強く、旭小学校は県下の名門校として聞こえていた。新たな歴史を作る精神薄弱教育においても、次第に先進的な役割を果たす地域になっていくのである。

昭和三十年には、旭小へ城西中の特殊学級を併設し、養護学校化を目ざして小中一貫教育を始めると、町の人々はこれを一気に学校に、学校へ押し進めようとして「高知市立養護学校設立期成同盟」を結成した。人々は花火がはじけるように立ちあがったのである。

氏原さん自身も、多忙な公務の間をぬって学校用地を求めて歩き、上京すれば文部省を訪問して市立養護学校の必要を熱っぽく説いた（このことは同省の先輩から逐一連絡があった）。待望の学校は昭和三十八年度に開校となったが、小・中の義務教育段階だけで、熱望した高等部は財政の都合で見送りとなった。

そこで私は退職して私立の高等部養護学校を作る決意を固めだが、私もいつの間にか、旭の町の生活哲学「自力更生色」に染まっていたのである。学校は紆余曲折の末に、ようやく昭和四十四年に土佐市で開校した。光の村養護学校の始まりである。

この学校は高等部だけの三年制で、技術教育を中心に置いたが、昭和五十年には二年制の専攻科を新設して五年制学校とし、精神薄弱教育における工業高専を目ざすことにした。更に昭和五十八年には中学部を作り、青年全期に対応する八年制の学校に仕上げた。旭の町でスタートしてから三十四年と六カ月、思えば長い道のりであった。

旭の町の人々の生きざまに啓発されて、自力更生、自力更生と念じ続けた日々であったが、今、私の仕事は首都圏、近畿圏にも広がりつつある。

昭和六十年には東京都にパンの工場を作ったが、なお菓子と紙器工場の計画も進めている。昭和六十一年には埼玉県に光の村養護学校の首都圏版を作ることがきまり、生徒募集に取りかかっている。昭和六十二年には大都市近郊の千葉県に精神薄弱者の援護施設を作り、成人期の職業訓練センターを開くことも本きまりとなりつつある。また今年は京都府下に栗園を開いたが、これは光の村の学校教育を強化するとともに、近畿圏にも東京都と同じ工場を作る前段階の仕事である。しかし、この話を聞いた者は一様に、「なぜ首都圏？、なぜ近畿圏？、どうして地元高知ではないのか」というが、理由は簡単である。

精神薄弱者の自立する人生は、どんな学校教育でもそれだけでは作れない。一人ひとりの必要にどこまでも応じ切る生涯教育の組織がいる。「就職すればしたで、結婚すればしたで、子育てに入れば入ったで」、その都度全く新しい学習が始まるのだから、その都度新しい事態に対処する指導がいる。生涯続く良い教育の組織さえあれば、健常者と同様に「強く、賢く、豊かな人生」を築くことは不可能ではない。

この生涯教育の中核は「仕事」であるが、残念ながら過疎地の高知県はこの点が最も弱い。仕事が余りにも少なすぎて精神薄弱者の適職を求めることがむつかしい。だから学校の進路指導は、「とにかく仕事につけばよい」という結果になり、無理な押しこみ、はめこみに終ってしまう。会心の職場はほとんど得られないのである。

適職でなければ仕事への興味が持てない。一年以内の離、転職が異常に多いのも、原因は精神薄弱者よりも社会の側にある。だから過疎地では能力はあっても生かし切れず、ついには保護の方向へと落ちる者が多くでてくる。健常者ならば適職を求めて移住するが、仕事はできても一人で生活することがむつかしい精神薄弱者はそれができない。訴えることも、運動を起こすこともできない彼等は、結局生まれた土地で飼育されるだけになる。

この人たちが確かに生きる道は、第一に良い教育を受けること（幸い過疎地にはすぐれた教育環境がある）、そして仕事の多い土地で働いて生きる道を開くこと、この二つである。だから私たちは、首都圏、近畿圏を含む強力な広域福祉圏の組織を進めるのである。

私は今も旭の町に住んでいる。いつかはここを巣立つだろうが、心は永遠に旭人である。

（光の村養護学校校長）

私の自然

山脇哲臣（題字 文 写真）

寺田寅彦のものを読んでいると、彼が小学生の頃同級生に農家の子が一人いて、あまり学校の成績はよくなかったらしい。その子が鴫を捕るところを書いた文章がある。シギは冬枯れの田圃へ飛んでくると、草むらに身をかくして、周囲を注意深く見回している。田圃へシギが降りたとみると、その子供は、そのシギの周囲を直径二十メートルもある大きな輪をえがいてくるくる回るのである。すると好奇心の強いシギは、その子供から目を放さずにくるくる見回しているそうである。子供は次第に輪を小さく小さくしてゆく。シギは子供のまわる姿につれて首をくるくる回している。そして子供は手が届く距離になると、やおら手を伸してシギを捕えたそうである。

これを見て寅彦はひどく感心する。友達の農家の子は学校の成績は悪いけれど、本当のことを知っている。教科書の成績は悪くても実際の学問を身につけているというのである。

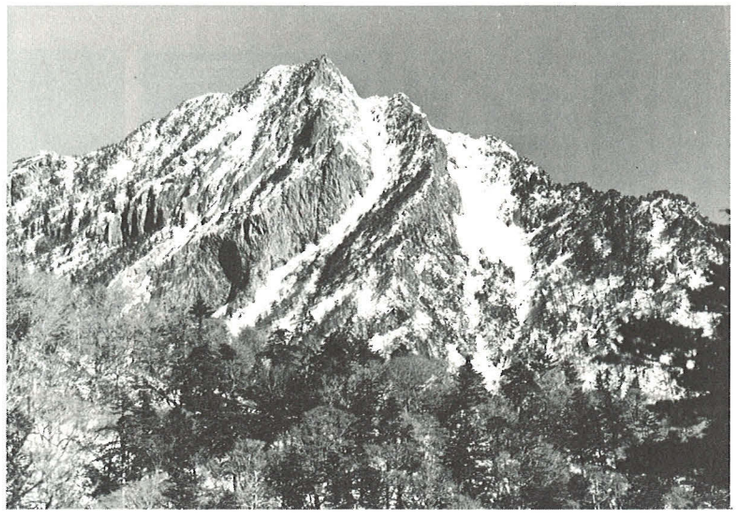
この寅彦の文章を読むといろいろと考えさせられる。第一は寅彦はどうも私のことを知っていて、その皮肉をいっているのではないだろうかと思わざるを得ないことである。私はトンボを捕えたり、魚をつかまえたり、鳥を捕えることは、その時代の平均的な子供より熱心で且つ上手で、その反面同級生よりは学業は不熱心で且つ通知簿の点は平均値より下であった。これは今もって私をさいなむ劣等感のもととなっているもので、あの寅彦の書いた農家の子供とは、若しかしたら時代はちがっても私をモデルにしたと勘ぐりたくなるような、そして皮肉られたような気がしてならない。

第二は今昔の感じである。今時小鳥を捕えて焼いて食うなどいったら、愛鳥家の諸君からどんな大目玉を喰うかということである。けれど、本当に一昔前まで山の子供達の冬の遊びは、他でもない小鳥を捕えることであった。捕えた小鳥は、焼いて食べるか、それもあったが、毎日自転車で売りにくる村の魚屋が、子供達の手から小鳥を買上げていった。それは山の子供達の格好のアルバイトでもあった。小鳥を捕まえることは楽しかった。ある私の尊敬する退職の校長先生は「もう一度子供に還って罠をかけて小鳥を捕まえてみたい」と昔をなつかしんでいたし、昨年の秋牧野植物園での野菊教室で、ある実年の小母ちゃんのいうことは、「罠をかけてツグミをとったことをよう忘れん」、この小母ちゃんはかなりのお転婆だったようである。

何でこの自然保護だとか、動物愛護の時代に、小鳥を捕える面白さなど…反時代的で反社会的なことを書くのか……でも仕方がない。私が自然を知り、自然の中に足を踏み入れたのは、他でもないそうしたことから、山の森や林の中を歩くことを知ったからである。寅彦の小学校の友達のように、草の繁みに隠れたシギの周囲をぐるぐる回って、それを捕える方法は、ずっと後に寅彦の随筆を読むまでは知らなかった。何故なら私のうまれたふるさとは、香美郡香北町の岩改の狭い細長い山間の渓間だったから、とてもくるくる走り回れるような広い田圃はなかったのである。

中学に入って、体がひどくだらしくなって、根気もなく成績はがた落ちになってしまった。医者にみてもらうと十二指腸虫だという。入院して除いてもらったが、以後登校拒否症児になってしまった。一年休学して郷里に帰った。そこで山の子供達から、小鳥の捕まえ方を教えてもらった。コモテの作り方、罠のかけ方に天分の才があったのか、たちまち覚えて山から山へ駆け回るようになった。百に近い仕掛けを山にかけて、その順番も間違わず毎日見て回ることが仕事になった。おかげで体力も次第につき、一年の休学で復帰できるようにはなったが、すっかりそういう遊ぶことが面白くなって、勉強にはそれ程力が入るはずもなかった。

でも今になって考えてみると、その時代の延長がそのまま自分になっているように思える。罠にかかってまだ羽根をばたばたさしているツグミ、「あ、とれた！」と思わず駆けよって、小鳥のからだを押しつぶして鼻孔を塞いで、殺してしまう。小鳥は本当に可愛い。カブトムシやカミキリムシやギンヤンマよりも遙かに可愛らしい。その愛する鳥を罠にかけて自分の手で殺してしまう。殺すのはかわいそうだが捕えなければおれない。何とも形容しがたい矛盾した哀感の混ざりあったものだった。夏毎日毎日ツガニを取って、しまいには籠の中で濡れてうごめく甲羅の黒々とした姿をみているうちに、何だか嘔吐をもよおしそうな気持悪さになって、それからもうツガニを捕えることはやめてしまったけれど、小鳥を捕えることはそうした気味悪さはなかったが、その生命を奪うことは、その何倍もかわいそうなのに、しかしそれを捕えることの嬉しさには、勝てなかった。



面河山より望む石鎚山頂

この頃我が家の庭に年中キジバトが訪れてくる。季節によってはヒヨドリもツグミもやってくる。ヒヨドリは騒々しい。椿の花に集ったメジロを追い散らし、傍若無人といったかっこうで、椿の花を嘴で放り投げたり、椿の花を散々に痛めてしまう。今までこんなに野鳥が市街地の真中にまでくることはなかった。人は山に雪が降って食物がなくなったから、餌を求めて街の中までくるというが、そんなことはない。私が小鳥を捕えていた時代は、山村のまばらな人家でさえ、その庭にキジバトがくることはなかった。彼等は警戒心が強くて、山田に降りてきて落穂などあさっていても、人の姿をみつけるとすぐさま飛び立って、林の中に隠れてしまった。今は街中で空気銃を射つ人もなく、悪童達にも自然保護が徹底したものだから、スズメに石を投げつけるなどの悪戯はしなくなったが、その分だけ注意が人間に向いて、イジメの世界に没入したものだろうか。

その頃空気銃は市内の銃砲店で売っていた。そして簡単に子供でも買えた。腔線の入ったものは免許がいったが、ないものは子供でも買うことができた。スズメ達もよく知っていて、マントに銃をかくしても、なかなか射程内に近寄ることはできなかった。私の空気銃はやがて陸軍中尉の義兄が満州へ持っていった。凄くよく命中したと腕を自慢していたが、私が思うに満州のスズメは、恐らくは空気銃を知らなかった上に、もともと大陸育ちでのんびりしていたから射てる距離まで大らかに近寄らせてくれたためだろうと思う。この空気銃はやがて終戦になってソ連に戦利品となってしまったらしい。小鳥達は実によく知っている。浦戸湾のカモは、禁猟区の一線を実によく知っていて、昼間そこから出て射たれるようなヘマなことをするものは一羽もいなかった。

キジバトが市内に棲みついたのは、そこが安全だからである。山村ではキジバトが増えすぎて作物に被害が出はじめている。そこでは射たれる心配もあるが、市内では大切にしてくれるし、それに子供達は内ゲバをやっているから、野鳥などにかまっていられない。それで市街地に小鳥達も集まっているのだが、庭で遊んでいるキジバトは、その肉の美味なことを知っている私にも、流石に捕えて食べようとは思わない。カワラバトも増えすぎて糞害がでて困るところは、美味だから食べたらよいと思うが、人も食べなければ何となく私も食べ難い。

今でもウズラの焼き肉はよく買ってきてたべるが、庭へ来るハトは食べる気がしない。別に愛鳥精神に徹底したわけではないが、何となく食べ難い。考えてみれば私の自然保護もそれ以上に理論的ではない。

都市づくりに向けての計画・提言・報告

三十万都市のデザイン
—県都中心街再開発構想—
荒木正彦（東京芸大講師）
昭和五七年三月高知新聞に連載

美しい街づくりをめざして
—高知の印象と街づくりについての提案—
高橋志保彦（神奈川大学講師）
市政研究第十四号に収録
昭和五八年十二月

県都あすの設計（一～十）
第一部　中心街再開発
第二部　高知駅周辺の改造
昭和五七年六月高知新聞に連載

うるおいのあるまちづくり高知市
—みどりと太陽あふれる人間都市めざして—
岡崎實（高知市建設部長）
「新都市」五七・七に掲載

高知の文化を考える（連載座談会）
発行　(財)都市計画協会
昭和五八年一月高知新聞に連載

はりまや橋周辺整備基本計画
高知のまちづくりを考える若い建築家集団
昭和五八年五月

高知駅周辺整備基本計画
高知のまちづくりを考える若い建築家集団
昭和六〇年一月

交通輸送網の整備と高知市中心街における公設大駐車場の建設に関する要望書
高知県商工会議所連合会
昭和五八年十二月

高知・二一世紀会議
RKC高知放送30周年記念事業
㈱RKC高知放送
昭和五八年十月

教育都市　高知市を求めて
(社)高知青年会議所
昭和五七年十一月

まちづくりみちづくり
—明日の高知市を考える—
(社)高知青年会議所
昭和五一年十二月

四国振興へのみち
—四国市長勉強会報告—
NIRA総合研究開発機構
昭和五一年一月

明日の四国　4
—高松会議'84の記録—
編者　高山英華　奥田道大
木原啓吉　浅田　孝
加藤秀俊　伊藤善市
鶴田俊正
発行　㈱清文社

高知駅周辺部市街地再開発等調査
高知市・㈱若竹まちづくり研究所
昭和五六年三月

高知市福祉牧場総合計画
高知市・㈱若竹まちづくり研究所
昭和五七年九月

地域イベントの地域振興への効果に関する調査
高知県・㈱若竹まちづくり研究所
昭和五九年三月

住環境整備の経済波及効果に関する調査
高知県・㈱若竹まちづくり研究所
昭和六〇年三月

地域の自然と知恵を活かした物的プロジェクトの提案
高知市・㈱若竹まちづくり研究所
昭和六十年六月

高知市同和地区環境整備基本計画
高知県・東洋大学工業技術研究所
昭和五四年三月

高知県華道界のあゆみ

有沢　梅窓

いけばなは日本最古の伝統芸術として、聖徳太子の献華の儀に始まります。以来、上流階級のたしなみとして栄えましたが、江戸中期頃より町民の手に移り、民衆にとけ込んでまいりました。

高知においても例にもれず、古くより旦那衆が主体となって、お茶とともに親しまれ、また、趣味として子女たちに教えられていたのであります。戦後になって、未亡人の働く場ともなったので、女性が主体となり、一躍女性華道家の出現をみたのであります。高知公園の梅の段を見ていただきたいと思います。明治、大正時代の華神の塔が毅然として建っております。やはり土佐人は、文化に対して男女の区別なく研究されたことは敬愛の念に堪えません。

社団法人高知県華道協和会は終戦直後の昭和二十二年四月に創立し、会長に故福田義郎高知新聞社長をお迎えして発足になったのであります。現在は中島暁高知新聞社長を会長に戴いて活動を続けていますが、常に各流派が一丸となり、初夏のいけばな展、秋のいけばな県展、夏の華道夏季大学を毎年開催し、発表活動に、研修活動に邁進してまいりました。現在は二十二流派、会員五千名を擁するまでになりました。

演劇観賞運動

坂本　計司

高知に初めて演劇観賞団体が誕生したのは昭和三十二年七月です。高知のような辺地で、本格的な新劇公演を二カ月に一回、定期的に開催するということは実に画期的なことでした。会員三百名で発足し、最高時には千二百名の会員を集めた高知演劇観客団体協議会でしたが、例会を財政的に保証する恒常的な会員数を維持することができず、昭和三十八年二月の第三十三回例会を最後に活動を停止しました。

しかし、この先輩たちの蒔いた種は、その後の昭和三十八年十月に発足した高知勤労者演劇協議会に、そして昭和四十九年五月に名称変更した高知市民劇場へと、しっかりと引き継がれました。一時は再起不能といわれるほどに衰退した時期もありましたが、昭和五十五年十一月例会で遂に念願の二ステージを実現、それ以後着実に会員数を伸ばし、今年一月例会から五ステージもの公演をもつまでになりました。

高知市民劇場は今、仙台、前橋についで全国で第三番目に大きな演劇観賞団体にまで成長しました。それは高知演劇観客団体協議会の時代から一貫して「会員制」の組織として、会員の手による民主的運営で会を支え、会員自身の要求でサークルをつくり、誘いあい、励ましあって、観つづける仲間を増やしつづけてきた会員みんなの力によるものです。

『人間誰でも、よりよい人生を生きたいと願っている。が、励ましがなければ途中でくじけてしまう。演劇はそれを励ましてくれるのです』――これは私たちの実感を言葉にしたものです。舞台から受ける感動は人を励まし、感動を語りあうことによって生まれる共感がより豊かな人間関係をつくりだします。私たちは、「私たちを励まし、勇気づけ、人生や人間を信じられるような」演劇を求めつづけていきたいと思います。私たちの会は来年、三十周年を迎えます。

（高知市民劇場代表幹事）

連絡先　電話　23―2715

立脇バレエ三十年のあゆみ

立脇千賀子

高知市に立脇バレエ研究所を開設して三十年になります。その間、バレエを学ぶ人、鑑賞する人の数は年々増え続け、バレエに対する関心は非常に高まってきました。こうした時流の中で、立脇バレエも初期の年一回の公演が、今では春の市文化祭と秋の県芸術祭に参加する年二回の定期公演となり、また、ジャンルの異なった団体との共演も手掛け、年ごとに活動の幅を広げてまいりました。

第28回定期大会

創立30周年記念春の発表会

立脇バレエのメイン・プログラムは「ジゼル」「白鳥の湖」「シンデレラ」などですが、この他にも多くの古典作品に真剣に取り組みその成果を発表しています。

県外での主な活動を列記してみますと、昭和五十三年から始まった日本バレエ協会主催の文化庁助成全国合同公演に毎回出演、昭和五十七年度文化庁芸術家国内研修員に吉岡かやのが選出、昭和五十八年から始まった日本バレエコンクール四国大会では三年連続上位入賞など、各種コンクールに、全国のバレエ団との交流に、日頃の稽古ぶりを発揮してきたいと願っている。が、励ましがなければ途中でくじけてしまう。演劇はそれを励ましてくれるのです』――これは私たちの実感を言葉にしたものです。舞台から受ける感動は人を励まし、感動を語りあうことによって生まれる共感がより豊かな人間関係をつくりだします。私たちは、「私たちを励まし、勇気づけ、人生や人間を信じられるような」演劇を求めつづけていきたいと思います。私たちの会は来年、三十周年を迎えます。

（高知市民劇場代表幹事）

連絡先　電話　23―2715

高知アートギャラリーという画廊

桑尾　寿秋

高知アートギャラリーは、高知橋南詰め東側の、電車通りに面した白田ビルにあります。

壁面約三十メートルを有し、奥行きに広く、入るにしたがって屈折していく壁面は理想的に区分されて、鑑賞しやすい優雅な雰囲気をつくっています。フロアーにも工夫がなされ、奥が一段低くなり、そこにソファーが置かれて休息と談話の場として利用されています。

高知駅に近い関係もあり、時々観光客ものぞいていきます。立地条件も良く、加えて一階ということもあり、これだけの画廊は都会にも数少ないと思います。

戦後、美術への関心の高まりとともに、急速に画廊がふえていますが、数だけでなく、その内容が真剣に問われる時期がきていると思います。画廊は、多彩になった利用者の要求に応えること、美術をめぐるより良き関係と環境を創ること、それと同時に画廊自身の優れた主張と指導性も必要とされています。つまり画廊は、単に美術の販売と鑑賞の場というこれまでの枠から、それを核として、あらゆる文化的、芸術的要素の交流が可能な場としてのあり方を考える時期にきています。

高知アートギャラリーは、開廊八年になりますが、「ゴヤ銅版画カプリチョ展」「世紀末のウイルス展」「ホルスト・ヤンセン展」「ドイツ現代版画展」など、印象にのこるかずかずの企画展を催してきています。その間、単に版画だけにとどまらず、油絵、日本画、陶芸から立体に至るまでの幅広い展開をみせており、かたわら「アブストラクト'85」のような郷土作家の紹介にも尽力しながら、常に一貫した姿勢の中に、バランスある進展を示しております。

これからも私たちの親しめる画廊として、あらゆるコミュニケーションの場でありながら、高知の文化向上のためにますます寄与されんことを期待するものです。

（洋画家）

連絡先　電話　84―1961

風伯

文化への意思

文化の時代が強調されるようになってしばらくたつ。美術館や博物館が多く建設され、文化イベントが盛んに企画され、各種の文化教室やカルチャー・センターが、かつてないブームを呼び、カルチャー婦人とかカルチャー族という新語まで生まれた。高知市においてもその例外でなく、中央公民館の市民学校や各種文化教室が花ざかりである。

ところで大阪が世界に誇る〝文楽〟は、技量が卓越した芸術集団に支えられたものであるが、それが大きな危機におちいっている。

その理由は〝文楽〟を愛好し自らも地唄や浄瑠璃をうなっていた船場の市民たちが、都市開発のため大阪の都心からはなれることによって、船場文化がなくなってしまったためだという。つまり市民生活に根ざした文化の土壌がなくなれば、プロの芸術まで大きな影響を受けるのである。

文化を創造するということは、まずそれを生み出す人間、さらには文化集団をつくることである。これは施設をつくることに比べて比較にならない大きな努力と時間が必要であり、行政にも市民の側にも、その意思がなくてはならない。

しかし最近の文化ブームの表面的な薄っぺらさをみていると、時代は文化の方向を向いているというよりも、むしろ文化の空洞化の方向に向いているように思う。新しい年の出発に当たって、もう一度文化とはなにかをじっくり考えてみたい。

（青）

祭りの変質

古くからの伝統行事としての日本の「祭り」の意味は、神が本殿を出て御旅所へ赴くまでの道中における神喜びと、それに和する氏子たちの芸能的表現が基本であり、その行事の全てを祭りと呼ぶ。仏教行事における祭りは少しく異なる面もあるが、それにも「行道」といわれる道行きがあり、やはり道中において仏の舞いがある。言葉の成り立ちをいえば、神にも仏にもマツラフことなのである。

祭りのもっとも主となるのは、現代でも人が死んで神となり仏となった後、年の暮れに、あるいはお盆の時期に現世に現れて来て、子孫への幸福招来を約束し、共に舞い遊ぶ時をいうのである。

近頃言われるところの「祭り」は昔の祭りの意味を離れて、現代社会の経済的繁栄を招来祝福する為の行事を総称して呼ぶようになって来ている面が多い。いわば人間の現世欲に根ざした団体行為である。昔のままの「祭り」の言葉でこれを呼ぶことは、もはや当を得ないように思う。ここらで「祭り」に替わる新しい言葉を案出してみてはどうだろうか。昭和四十年代に中国移入の「百花斉放」という言葉が流行ったことがある。斉でも騒でも言葉はいくらでもあろう。そのなかで古い祭りの芸能を模倣しようが、新しい西洋の身振り手振りを取り入れようが自由にやってみたらよい。心配することはない、古い祭りも決して無くなることはないのだから。

（旧人）

そのかたわら、社会福祉にも目を向け、高新社会福祉事業団を通じての寄附、年末助け合い運動や自然災害への援助活動など、その時々の社会情勢に応じて会員一同が協力一致して取り組んでまいりました。助け合い活動は、いけばなで培われた情操精神の発露でもあります。

私ども華道に生きる者のこれからの使命は、時代に生きる創造性についての研究が重要な課題であります。先人に引き続き華道の探求に精進、研鑽を重ねてゆく覚悟でございます。

（高知県華道協和会理事長）

連絡先　電話　73―2957

大きな成果をあげてまいりました。

また、七年前から福祉施設「子供の家」の児童たちを招き、公演を鑑賞していただいています。高知市福祉施設芸能大会では、振り付けのお手伝いもさせていただき、子供たちと一つの作品を創りあげることに大きな喜びを感じています。奉仕活動は私どもの大切な仕事の一つです。

これからも、今までの経験を活かして一層の努力を重ね、皆さまに愛されるバレエ研究所として活動を続けていきたいと思っています。

（立脇バレエ研究所主宰）

連絡先　電話33―2414

新しい高知文化の創造に向けて

高知市文化振興事業団が発足して一年と七カ月が経過しました。

高知の文化の振興のため何をどうするか。

文化の向上を願う市民の力に支えられ、試行を重ねながら、手探りの中で、いくつかの事業に取り組んできました。財団が生まれたことで芽を吹いた事業も多いと思います。

これらの事業を今後どう発展させ、向上させていくか、さらに市民を主体とする文化活動としてどう定着したものとしていくか。

今、財団は創業期の第一波を乗り切って、次の大きな課題に向かうべき時にきています。市民が創り出した財団を、真に文化の時代にふさわしい新しい高知文化の創造の核とし、その活動を揺ぎないものとするために、当面の課題を明らかにし、市政施行百周年を迎える昭和六十四年を第一次目標年度とし、取り組むべき重点事業を次のとおり考えています。

高知二一世紀シンポジュウム

●二一世紀のあるべき高知の姿を探り、グローバルな視点で高知のビジョンを追求する。

●西暦二千年まで、定期的に開催していく。

●広範な市民の参加を得る手だてをこうじる。

●学者、実務家等の専門家の参画を求め、高水準のものを目指す。

市民フォーラム

●「個性ある高知づくり」「都市活性化のビジョンや手法」等の身近なテーマをもとに、実践的な研究を深める。

●原則として毎月一回以上開催する。

●人数の多寡にかかわらず密度の高いものとする。

●研究成果はレポート化し、具体化できるものは、実践に向けて活用を図る。

講演会

●従来の一方通行の講演会だけでなく、聴衆と講師が一体となって問題を考えてゆくため、複数の講師による新方式の講演会も取り入れる。

まんがゼミナール等の開催

●まんが家を多く輩出する高知の特性に着目し、まんがについて親しみやすく、より深い内容のゼミナール等の企画を考える。

「高知の将来」についての研究、調査

●より高次の視点と広い視野を持って高知をとらえるため、学術研究助成事業の枠を拡大して、高知についての研究を推進する。

●研究の内容、規模によっては中央の専門家等の参加も求めていく。

高知保存運動の推進

●今、高知で残しておくべきもの（建物、景観、事物、風俗、民俗、生活文化等）を取り上げ、それらを文化資産として次代に保存、継承する運動を市民サイドで進める。

龍馬音楽祭

●高知で開く日本的規模の音楽祭とすることを目標に、毎年テーマを決め、継続して開催する。内容、方法等は今後検討する。

貴重資料の収集

●散逸が心配される郷土の優れた文化遺産を収集する。

出版

●地方の学術研究を振興し高知文化の創造と発展に寄与するため、多様な出版事業を手がけていく。

●時宜に応じた提言・資料等を刊行していく。

●高知の文化を幅広く推進していくためのオーガナイザーとしての役割を果たす出版としていく。

各種文化施設の建設促進

●市民サイドから市民文化ホール、自由民権記念館、坂本龍馬記念館の建設を盛り上げていく。

好評配本中！

文化・経済大講演会

新年に贈る財団の大型企画として、豪華な顔ぶれの講演会を開催します。おさそいあわせてご来場ください。

講師名・演題等

三浦朱門（文化庁長官）
「日本文化と異国文化」

日下公人（社団法人ソフト化経済センター専務理事）
「経営センスと日本経済」

日時・昭和六一年二月二十五日（火）
・午後一時から四時まで
開場　十二時三十分

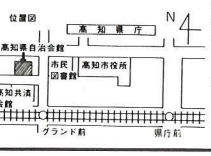
会　場　県民文化ホール（オレンジ）

入場料　無料（整理券が必要です）

＊整理券は財団、高新プレイガイド、第一證券高知支店で配布予定です。先着順で締め切ります。

協賛　第一證券㈱・高知新聞社

事務所移転のお知らせ

高知市文化振興事業団では活動の仲展にともない事務所を十二月十八日に左記に移転しました。今後とも、皆さまのご支援ご協力を得て、活動を広げてゆきたいと考えますので、よろしくお願い申し上げます。

住所　〒780　高知市本町五丁目二番三号
高知県自治会館二階
電話七三―四三六五／三―八二一一（内六八七）